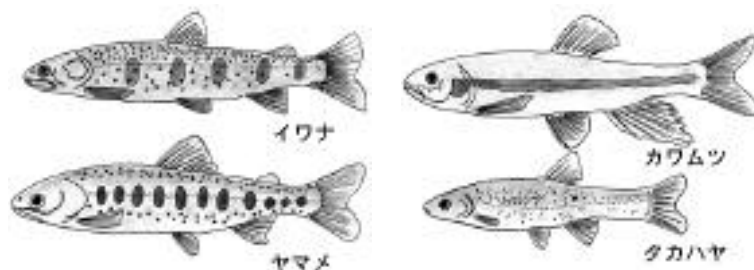


田倉川と暮らしの会 第2号

1998年9月26日発行

● 赤谷川の魚を観察する



図は、森照代さん

田倉川は、今から三十年頃前には、たくさんの種類の魚が生息していた。アユ・マス・サケ・ウグイ・コイ・フナ・ウナギ・ヘラタ・タケウオ・イシグイ・アジメドジョウ・アカラ・ナマズ・ゴリ・イワナ・アマゴなど、川の上流域から下流域に生息する魚の殆どがいたことになる。当時は、緩やかな淵や木工沈床が多く設置されていて、魚の産卵や摂餌などの環境が多様であったという。権八さんは、少年時代ときどき学校をさぼって沈床に潜り、大きなマスをヤスで突いて捕ったそうだ。

魚類の専門家森照代さんをお願いして、赤谷川第九堰堤の水落としの下で投網による捕獲調査をもらった。確認された魚は図のようにイワナ・ヤマメ・カワムツ・そしてタカハヤの四種で、これらはすべて上流域に生息する魚である。魚の学習をしよう。

イワナ（サケ科サケ亜科イワナ属）：

河川源流域を中心に水温十五度以下の場所に生息する。完全な動物食生で、流下昆虫・低生動物・または大型の個体ではイナゴ・トンボ・クモ・甲虫なども食べる。一年で十から十五センチ、三年で三十センチに達するものもいる。普通満三歳直前の二歳魚で成熟する。産卵期は十から十一月中旬。

ヤマメ（サケ科サケ亜科サケ属）：

上流域から渓流域にかけて生息する。イワナ同様完全な肉食性で、流下昆虫や落下昆虫などを主に食べる。産卵期はイワナより一ヶ月早く、淵尻の砂れき底を産卵床とする。ヤマメの中には、一年を河川で過ごした後、降海して成長するものがある。この個体をサクラマスという。

カワムツ（コイ科ダニオ亜科オイカワ属）：

上・中流を中心に流れの穏やかな淵に多く生息する。岩の間やヤナギの下などに隠れる性質があり、開かれた場所にはあまり見かけない。雑食性で、縄張をつくってその中で落下昆虫や付着藻類、底生動物などを食べる。五から八月に川の平瀬の砂泥底部やレキ底部で産卵する。摂餌場所をめぐる個体同士が激しく争うことがある。

タカハヤ（コイ科ウグイ亜科アブラハヤ属）：

水の冷たい場所を好む種で、上流域から渓流にかけて生息する。稚魚の間は岸際の淀みや水草の中で暮らす。成長するに従い流れの速い所に移動する。雑食性で水生昆虫や付着

藻類をい食し、春から初夏にかけて平瀬の砂泥底などで産卵する。

● 澤田先生入会 六号堰堤探検



京都大学防災研究所、穂高砂防観測所の工学博士、助教授の澤田豊明先生は、当会活動と田倉川に魅せられて早速入会し、九月十二日現地を訪れた。澤田先生（写真右端）と私は、この日伊藤、辻会員の案内で赤谷の歴史的遺産である九・八・七号堰堤を踏査六号堰堤を探検した。森をかき分け沢を登り、ようやく石積み堰堤を発見

した。殆ど雑木や草に覆われているため地元の人でも存在を知らないほどである。その後、権八会員の炭窯を見学した。丁度焚口を塞いだところで、独特の匂いと温もりに感激。



「明治の土と石積み堰堤」と権八会員の「黒炭窯の作り方と焚き方」は次回から掲載します。希望者は田中保土まで。